

中国のほんの話(18)

中国の本屋さん(上海)

蔭山 達弥

2001年の夏、上海は同年9月に開催されたAPEC首脳会議直前ということもあって町並みは華やかに彩られていた。僅か3日間の滞在であったが、中国の最先端に行く上海を満喫した。東西に長く伸びているメインストリート・南京路の東側半分は終日歩行者天国になり、平日の昼間でも買物客で溢れていた。この南京路に平行して、京都の三条通り、四条通り...のように北から南に何本もの通りがあるのだが、例えば最先端のファッションなら淮海路、本なら福州路という風にそれぞれ特長がある。

上海には「上海書城」という1999年にオープンした20階建ての超大型書店があるが、筆者は「上海書城」より少し東側にある「図書城」という店をまず訪れた。「図書城」は3階までが店舗で、3階は特價本コーナーになっていた。1階の入口付近は日本の本屋さんと同じ様に新刊書が平積みと並べられているのだが、北京の本屋と較べてみて、とにかく本が綺麗で、立ち読みしている人も本を丁寧に扱っているという印象を受けた。北京に滞在中、スタンドで買った新聞に紹介された新刊書がどの店に行っても見当たらないということがしばしばあったが、この店の店頭には置いてあるわ、置いてあるわ...帰りの荷物の多いのを忘れて、両手に抱えきれないほど買ってしまった。読者の皆さん、中国の新刊書を買いたいのなら、上海に行くべし。

「図書城」で満喫し、沢山の荷物を抱えて町中を歩き回るのも大変なので、滞在先のホテルに一旦戻ろうかなと考えていると、「図書城」の斜向いに「外文書店」(写真)の大きな看板が目に入った。びっくりしたのは入口にコインロッカー(後からお金が戻ってくる)が置いてあって、ガードマンのおじさんは沢山の荷物を抱えた筆者を

見て、ロッカーに入れるように視線を投げかけた。腹が減っている時に食品売場にいると、ついつい余計なものを買ってしまうが、買った本を預けて身軽になると、また買ってしまおうのが人の常、本来は万引きの事前防止に置いてあると思われるコインロッカーに妙に感動してしまった。



外文書店(上海)

「外文書店」は文字通り外国語に関する辞書、書籍が豊富に置いてあり、1階は昨今の外国語ブーム(特に英語)を反映して、学習教材が多数並べられていた。筆者のお勧めは2階の美術書・写真集の売場である。北京では高額な美術書は鍵を掛けられていて、見たい時は店員にいちいちその旨を告げなければならないのだが、ここでは複数置いてある本は必ず1冊はビニールを剥ぎ取られて、棚に並べられていた。筆者は中国の油彩画に興味を持っていて、何人かお気に入りの画家(例えば何家英、彼は村娘や都市の女性を主に描く)もいるのだが、北京では見かけなかった彼らの画集が置いてあって、当然のことながら購入した。

「図書城」、「外文書店」でおなか一杯になり、「外文書店」のとなりにある「古籍書店」に入る気力がなくなったので、予約している夜の上海料理に備えて、その日は滞在先のホテルに一旦戻った。

パソコン、インターネットは、青年層を中心に中国でも都市部で目覚ましい勢いで普及しつつある。その一方で、読者離れが叫ばれて久しい。実用書やファッション雑誌の売れ行きは良好だが、文学関係の凋落が激しい。南のある都市では特價本の量り売りまで登場したそうである。でも、行く先々で見かけた熱心な読者のすがたを見て、書籍というメディアもまだまだ捨てたものじゃないと実感した。

かげやま たつや(助教授・中国文学)